

「ONE TEAM」が今年の「新語・流行語大賞」年間大賞に輝いた。ここ数年で学校現場でも「チーム〇〇」ということが言われるようになってきた。梁川高校にも「チーム梁川」という言葉がある。

昨日の第2学期終業式では、お決まりのパターンではあるが、式の前に表彰、式では校長の話、教務部長の話、生徒指導部長の話と続いた。教務部長は簡潔に生徒に語りかけるように、まるで授業のように話してくれた。そして、本校の生徒指導部長である長澤敏浩教諭の話となった。

彼は本校7年目、その間ずっと生徒指導部長を務めている。梁川高校が現在の状況になったのは彼の功績によるところが大きい。彼を中心とした先生方の日々の努力の賜物である。彼は、7年間、雨の日も風の日も、太陽が照りつけようが雪が降ろうが毎朝立ち続けている。だれに言われたわけではない。本人曰く「修行です」とのことだった。私も4月から一緒に修行をしている。

昨日の終業式で長澤部長は、梁川高校を「チーム」に例えていた。監督が校長で、先生方がコーチ、選手は生徒たちである。なるほどと思った。100人を超えるチームの監督である私には大きな責任がある。また、冬休みを前にして生徒指導に関わることを具体的に指導してくれた。終わった後に、私は彼に声をかけた。「長澤さんは、全校生の担任だな」とすると、彼は「荷が重すぎます」そんなことはない。実際、彼は全校生の担任のようなのである。朝、生徒たちは彼の前にくると、何かしら会話をしていくことが多い。私が、彼に生徒のことを聞いたりすると、ちゃんと答えが返ってくる。一人一人の生徒のことをよく把握している。中学校時代のことから現在の状況までである。きっと教師に向いている人である。

長澤教諭は、野球部の顧問も務めている。専門はとなれば野球である。しかし、本校の野球部は現在部員が2名である。保原高校、川俣高校、福島南高校と連合チームで大会等に出場している。彼は、もっと野球の指導をしたいはずである。だが、現状ではむずかしい。それでも彼は自分の職務を誠実に全うしている。

梁川高校が「ONE TEAM」だとすれば、それは長澤部長と優秀なコーチ陣である先生方のお陰である。監督はほとんど飾りのようなものである。監督としてできるのは、コーチ陣の努力を認め、感謝することくらいである。コーチ陣が生き生きと活躍することが、選手である生徒たちの成長につながる。

「ONE TEAM」といえば、ラグビーである。あのドラマの影響が強く、米津玄師さんの「馬と鹿」のフレーズが出てきてしまう。なお、今年の紅白歌合戦では、松任谷由実さんのあの名曲「ノースサイド」が披露される。2019年、平成31年と令和元年を代表する言葉が「ONE TEAM」でよかった。後から振り返ったときに、日本中がラグビー日本代表のあの感動的な試合を思い出すことができる。ポジティブな気持ちのよい言葉である。少なくとも「タピる」でなくてよかった。たまに娘が注文したタピオカミルクティーをもらうことがあるが、何がいいのかわからない。流行とは恐ろしいものである。次から次へと新しいお店ができていく。そんなにこの流行が続くのだろうか。

4月から「チーム梁川」の監督に就任したわけだが、長澤コーチをはじめコーチ陣である先生方におんぶに抱っこだった。これからチーム梁川が「ONE TEAM」になれるかどうかは監督にかかっている。そして3月1日、感動のフィナーレを迎えることができるかどうか監督の力量次第である。